

「アメリカ詩をディベートする」渡辺信二

シンポジウム第十二部門「大学における英文読解を見直す」(本文6300字=50字×126行)

司会：日本女子大学教授佐藤和哉(さとうかずや)

講師：「アメリカ詩をディベートする」渡辺信二(立教大学教授)

- 1 概要：本報告は、教材をアメリカ詩作品とし、運営を日本語によるディベートで20年間行ってきた英米文学科の一授業を紹介する。文学とりわけ詩作品は、その国や民族の文化の精髓なので、これを知れば、他国や他者を理解しやすい。また、ディベートは、良し悪しを別にして、今の世界をリードする米国精神の根幹なので、これを身につけるなら、米国理解を果し、国際化も果し得る可能性を開く。だが、文学教育は経済的に無駄に見えるためか、文学の読みはそれぞれ違って良いとして議論を嫌う偏見のためか、また、ディベート教育は、それが牧歌的な上下関係を終わらせるためか、そもそも論争を嫌う日本人の性格の問題なのか、ともに、日本の教育現場では受け入れられにくい。果たして、文学をディベートする教育は、日本の文化状況を変えうるか。本報告が大学における教育のあり方を探る一つの問題提起となれば幸いである。
- 2 ディベートの目標：ディベートは国際社会を生き抜く倫理を養う。思考訓練、言語訓練を経る中で、自己表現能力と説得力を培い、良き自由人、良きコズモポリタンを育てる。
- 3 ディベートの大前提：もともと、人間のいう真理とは、(神にとって)真理の一片にすぎない。ディベートとは、神の眼から見た真理に成る可く近づこうとする目標を共有した上での議論であり対立である。
- 4 ディベートの起源：ギリシア・ローマの弁論術に起源を見る人が多いが、歴史上有名なパトネー・ディベートを引くまでもなく、ディベートは、ピューリタンと共に始まる。彼らは、『聖書』とりわけ「ヨブ記」や「ヨナ記」を愛読した。マサチューセッツ湾岸植民地を築いたウィンスロップ「キリスト教的慈愛のひな形」には、ディベートの原型がある。その行論は、神の真理に到達しようとする果敢な挑戦であった。これが教育にも積極的に取り入れられて、20世紀初頭のアメリカで既に、ディベートが大学の単位科目になっている。
- 5 アメリカ詩をディベートする：ディベートに関する上記の指摘を踏まえれば、文学の授業に於けるディベートとは、作品をより良く理解し、不明な点を説明し尽くそうとする共通目標のために行われる議論であり、対立である。肯定・否定双方が相互学習を目指す。では、なぜアメリカなのかと言えば、善悪は別にして、現在、アメリカが世界を政治経済文化的にリードしているためだ。ここで対象が文学なのは、文学が文化の精髓であり、真情に達する道であるためだし、そのためには、精読が必然となるからだ。詩作品とするのは、一授業一作品で完結することが可能だからである。なぜ、日本語で授業運営を行うのか。それはまず母語でディベートできることが重要であるから。アメリカでは、ディベートの授業は、母語で小学校から行われている。
- 6 事前準備：クラス運営は、MC(司会)グループと、2つのディベーター・グループが役割を分担する。
  - 1) MCは、説明を手際よくできるように、少なくとも1度は発表の練習をして時間配分を調整しておくこと。
  - 2) MCのレジュメに関して：A4判が基本。4枚以内にまとめA3判2枚で構成・複写し、クラスに配布する。
  - 3) MCのレジュメには、作者紹介、作品の説明、時代背景等を手際よく美しいレイアウトでまとめる。参考書の中で特に、Norton Anthology of American Literatureを参照せよ。図書館本館に常備してある。
  - 4) ディベーターは、グループ内で肯定と否定に分かれ、少なくとも一度は練習しておくこと。肯定か否定かは、当日に決定されるが、どちらであっても対応できるように準備しておくこと。
  - 5) 作品分析に関して、肯定・否定に特化した視点を導入することで、これまで気づかなかった側面や新しい読解をもたらす。限られた時間でいかに重要な点から説得するのかを訓練する。単に、勝敗が目的ではない。肯定か否定かは、ディベート開始直前にMCによるトスで決めるので、いずれになっても対処できるように準備しておくこと。なお、以下の傑作の定義を参考にしながら、担当作品の吟味を行うこと。
- 6) 傑作の定義の例 (The Definition of the Masterpiece) : (1) It is original in any/some sense.
  - (2) It renovates the literary tradition; it shows a new style, an original aesthetics.
  - (3) It has a unity in theme, plot, structure, message; it is well organized. … …
- 7 クラス開始：全体90分を30分ずつ、作品読解・ディベート・議論に分ける。全てMCのもとに進行する。
  - 1) MC：クラス開始前に教室の整備。また、配布資料リスト、レジュメの訂正その他の必要事項を黒板に板書。授業開始の宣言、司会者の名乗り、ディベーターの紹介、レジュメの確認。(1)
  - 2) MC：作品の背景説明：作者の価値、文学史上の評価、時代背景など。(4)
  - 3) MC：作品の内容説明：テーマ、設定、語り手、メッセージ、文体、韻律、形式、イメージ、言葉その他。(5)
  - 4) MC：クラスに当てながら、作品全体を読み、訳し、説明する。(10)

5)MC：MCの説明に関しクラスから質疑を受ける。質問がクラスの義務である。特にディベーターは、MCの説明に対して、それぞれ必ず3つずつ質問をすること。(5)

8ディベート開始前の心得：論題「この作品は傑作である」をめぐる日本語によるディベート。クラスは、パロット用紙にメモすること。パロット用紙は教員が用意する。

- 1)MCがディベート全体の進行係である。始めにトスを行ない、肯定・否定を決める。
- 2)MC:肯定・否定が決まった後、ディベート前に2分間の作戦タイムを取る。
- 3)MC:ディベートを開始する。肯定立論などセッション全ての始めに、「始め」と言う。
- 4)MC:計時の仕方。肯定立論などセッション全ての時間を計る。セッションの始めに、MCが「始め」と言えば、たとえ当該グループが話し出さなくとも、時計を走らせること。時計を止めるのは、明確に当該グループが「以上です/以上で終わります」と宣言した時である。何分経過したか、クラスに知らせる。クラスは、パロットシートに書き込む。

9ディベートの進み方：以下は、ロスタイムを入れて全体30分のディベート形式である。

- 1)肯定側第1立論(4mins.)定義、結論、理由、証拠、結論確認。ナンバーシステム採用のこと。
- 2)否定側反対尋問(2mins.)主導権は尋問側にある；15/30秒ルールの適用は尋問側に対して行われる；自分の意見は言わない・相手に意見を言わせない；Yes/No, A or B Questions, 5W1H Questionsが望ましい。
- 3)否定側第1立論(4mins.)結論・定義、理由、証拠、結論確認。ナンバーシステム採用のこと。
- 4)肯定側反対尋問(2mins.)主導権は尋問側にある；15・30秒ルールの適用は尋問側に対して行われる；自分の意見は言わない・相手に意見を言わせない；Yes/No, A or B Questions, 5W1H Questionsが望ましい。
- 5)作戦タイム(2mins.)相手立論・尋問応答の分析、反駁順序・防御手順の決定。
- 6)否定側第1反駁(2mins.)攻撃と防御の組合せ：相手立論の最重要点から攻め、自分の弱点を守る。
- 7)肯定側第1反駁(2mins.)攻撃と防御の組合せ：相手立論の最重要点から攻め、自分の弱点を守る。
- 8)否定側第2反駁(2mins.)第1反駁からの継続。最後は、結論を再確認して終わる。
- 9)肯定側第2反駁(2mins.)第1反駁からの継続。最後は、結論を再確認して終わる。
- 10)第1回戦評価(2mins.)評価基準は自分の意見との一致ではない。どちらがより説得的/論理的かを評価。
- 11)判定：MCを含めクラスの挙手による。その後、MCが「今回は、○対●で、肯定/否定グループがより良いディベートを行ったと判定されました」と言う。クラスは、両チームの健闘を賞賛し拍手する。

10議論、ディベート終了後：

- 1)MC:ディベートの要点、対立点、疑問点などを整理し、問題提起する。(3)
- 2)MC:重要な論点から順に、教員のコメントを含めて、クラスから意見を活発に導く。司会が最初に示した9つの質問とも絡めること。この作業においてこそ、MCの力が真に試される。(20)
- 3)MC:次回の日程・担当者、および、連絡事項の有無を確認、コピーカードの受け渡し、クラスの終了を宣言。

11授業終了後の仕事：各グループはコーラス(Chorus)に発表の訂正版を掲載すること。また、その内容をクラス全員が点検すること。コメントや質問は、ディスカッション欄に投稿してください。

- 1)MCは、じぶんたちの発表資料、発表要点や議論の詳細なメモを、ディベーター・グループは、立論メモ(「幻の立論」および反省点を含む)をまとめる。なお、「幻の立論」とは、用意したが使わなかった立論である。
- 2)上記1)のメモを、48時間以内で整理して、コーラス(Chorus)の「ディスカッション」にそれぞれ、「●月●日授業メモ」または「●月●日立論および反省」としてアップすること。なお、必ず、西暦を含む発表した日、ディベーター・グループ名を明記すること。
- 3)各自、ディベートのパロット用紙をクラス終了直後に提出すること。この提出をもって出席票とする。

12 演習で20年間ディベートを行ってきた

1) ディベートのデメリット：

- (1)授業でディベートを始めた頃は、意見の対立がそのまま、クラスの外に持ち出されて人間関係が崩れる場合もあった。これは、意見と人格を区別できない日本の伝統的な文化のせいでしょう。意見の対立が友情を深めるのか、それとも、人間関係を断ち切るのか。かつては、意見が異なると、侮辱されたと怒り出す者もいた。
- (2)グループで準備するので、一部の人にしわ寄せが行ってしまうことがある。また、発表の良し悪しは、予習の密度がストレートに反映される。
- (3)いくらディベートを行っても、その場で終わって、身に付かない者も多い。
- (4)勝ち負けの判定がその場限りのものである点もデメリットであろう。たとえば、反論が下手だったり、良い論

点を行かせなかつたりして、時に、誤った解釈をもとに議論したチームが勝利することがある。

- (5)ディベートの真の精神を理解せず、勝ち負けに拘る人もいる。
- (6)どうしてもディベートに馴染めない学生がいる。この理由は勉強嫌いではなく、ディベート嫌いであろう。議論そのものを恐れ、プライドが傷つくことを避け、あるいは、自分の考えと違う立場に立つのが辛い。

## 2)ディベートのメリット：

- (1)予習がしっかりなされる。グループ活動の大切さを知る。グループとしての予備ゼミを開いて毎週準備する中で、相互支援や相互補完が行われるようになる。卒業した後も、クラス会がよく行われている点を考えると、クラスとしての結束力が、ディベートを通じて培われていると言えるのではないか。
- (2)質問する力が徐々につく。20年間一貫して変わらないが、問いを立てる力が弱い。とりわけ、初めの頃は質問が出来ない、質問とは何か分かっていない。たとえば、「・・・と思うのですが、いかがですか？」を質問と勘違いしている。これは、相手の意見を求めているに過ぎない。
- (3)議論が好きなのもいて、そうした人たちは飛躍的に伸びる。初めの頃は、論題を文学に限っておらず、社会的政治的な問題も扱ったので、その資料となる英字新聞を小脇に抱えて通学する姿が流行したクラスもあった。
- (5)文学素材をめぐるディベートなので、政策論題のディベートと異なって、リサーチした情報量が決め手となることが無い。やはり、ディベートの勝敗の根本は、対象作品をきちんと精読してきたかどうかである。
- (6)国際的な企業は、ディベートを社内教育や社内研修に取り入れているが、そうした会社に就職しようとする学生が面接で、文学部の授業でディベートか、という反応を逆用して就職活動を有利に進めた話も聞く。
- (7)データを取ってきた訳ではないが、就職してからとても役立った、という反応が数年してから伝わってくることもある。あるいは、社内のレポートを書く力、現状を何か変だなと思う力がついたという反応もある。

3)ディベート授業の意味：現在世界をリードする英米の思考法の根幹に触れるなら、多分既に身に付けているであろう日本的な人生哲学を相対化しつつ、二つの発想を自覚的に身につけることが出来るので、国際社会を生きるこれからの日本の若者にとって重要な学びの機会であろうと確信している。

そもそも、英語教育で強調されがちな、基礎学力とか4技能といわれる「読む・聞く・話す・書く」能力を発揮するためには、実は、「考える・問う」という根本的な能力が必要だ。その点、ディベートを英語教育カリキュラム体系のひとつの頂点として位置づけることが可能だろう。ディベートは、思考力を養うのに最も適した授業形式である。実際、立論準備の段階では深く広い思考力を、ディベートの最中のとりわけ反対尋問や反駁では、即座に反応するための瞬発的な思考力を養う。そして、こうした思考力を支える基礎作業が、対象作品をきちんと精読してきたかどうかにあるため、文学的な感性を磨くことが文学でディベートを行う重要な意味となる。

逆に言うと、ひとつのクラスでディベートを頑張ってもあまり有機的にはならない。様々な授業の良い点を再検討しつつ、文法重視、読解重視、作文力重視、会話力重視といった様々に特化したクラスとそれらが相互関連する有機的なカリキュラム体系を生み出せるなら、学生たちの潜在能力をより引き出す高等教育を実施することが出来る。この体系があれば、就職活動などに侵犯されない確固たる大学英語教育を行っていけるだろう。だが、それぞれの大学に伝統があり、現実がある。また、それぞれの教員にはそれぞれの研究を授業に生かす権利と義務がある。新たなカリキュラム体系を直ちには導入し難いだろう。そして、英語教育・文学教育に対する社会的な蔑視が持続する。

13 発表では、以下の3資料もレジュメで示した。必要な方は、shinji@rikkyo.ac.jp にご連絡下さい。送ります

- 1) アジェンダ「ロバート・フロスト“Stopping by the Woods in a Snowy Evening”は傑作である」のディベートの学生メモ（2001年と2011年分）、
- 2)各セッションに於ける注意書きを含むディベート用バロットシート、
- 3)学生の提出したバロットシートの一例。